僕は食べ物を食べるとき、「ありがたみ」を感じることができない。「ありがたみ」といってもたくさん種類がある。その食べ物の命への「ありがたみ」。その食べ物を調理してくれたお母さんへの「ありがたみ」。僕が感じられないのは「その食べ物を育んでくれた生産者へのありがたみ」だ。生産者に対して全くありがたみを感じないわけではない。だが僕のその農産物に対する「ありがたみ」と生産者が労力、月日を積み重ねて農産物を育んでくれた「努力」がつりあっていない気がするのだ。これに対して僕が生産者だとしたらとても腹立たしい。きちんとその農産物に注いだ努力と同等の「ありがたみ」を消費者から受け取りたいと思うだろう。だが消費者の僕はそんなことなど考えずに「うまい。うまい。」と食べ物を口に運ぶだけだ。なぜここまで消費者はありがたみを感じることができないのだろうか。

　僕は今、愛農高校農業高等学校で寮生活をしている。この学校は教師と生徒が農場で働き、自給自足をしている。なんと自給率は七十パーセントだ。自分たちで育てた米、野菜、肉、卵、牛乳、果物などを調理場の職員と調理当番の生徒数人で調理し、それを愛農の食卓に並べる。僕が野菜部で収穫した野菜も食卓に並べられ、先輩、後輩、同期、先生方の口に入る。この野菜は僕たち野菜部が種をまき、苗を育てて、やっと収穫した僕たちの努力の賜物だ。当然この野菜は僕も食べることになるわけだが、この時僕はこの野菜の生産者でもあり消費者でもある。つまり「この野菜を生産する過程や努力や思いをすべて知っている消費者」になるわけだ。そんな立場でこの野菜を食べて色々なことを感じた。まず生産者として今までの生産の過程や努力を思い返してそれを今自分が食べていることに感動した。そしてこの野菜を食べている人に対して楽しんでこの野菜を食べてほしいと思った。少なくてもただの栄養補給としての食事や、何の思い入れもない食べ物の味をただ楽しむためだけの食事とは違った。その時僕は「ありがたみ」を感じることができていたかもしれない。それが「ありがたみ」を感じるということならば、僕は自分たちで作った野菜は「ありがたみ」を感じて食べることができる。ならば自分たちで作っていない米や肉、卵、牛乳、果物には「ありがたみ」を感じて食べることができないのだろうか。「ありがたみ」を感じるには生産の過程、努力、思いを全て知っていないといけないのだろうか。それならばすべての食べ物に「ありがたみ」を感じること無理だと思う。なぜなら毎日三食食べる生活をしていて全ての食べ物について全て知ることは難しいからだ。だが僕は、その食べ物について何も知らないから「ありがたみ」を感じられないというのは少し違和感を感じる。そもそも「ありがたみ」とはどういうことなのか。「ありがたみ」とは「有り難い」つまり「あることが当たり前ではない」ということだ。ならば「もしもその食べ物が無かったら」とかんがえてみると「ありがたみ」について分かるかもしれない。僕はみかんが好きだ。なので「もしこの世界からみかんが消えたなら」と考えてみる。もしこの世界からみかんが消えたなら世界中のビタミンが劇的に少なくなる。そうなってしまったら世界中の人の栄養が偏ってしまう。そうしたらたくさんの人が死ぬかもしれない。ビタミンを求めてビタミンを取り合うビタミン戦争が起こるかもしれない。話が飛躍しすぎだ。おそらく僕は何も変わらないと思う。この世界からみかんが消えてもこの世界は変わらず周り続けると思う。ではみかんはこの世界に必要ないのか。確かにみかんは主食ではなくデザートだからあってもなくても別にいいかもしれない。みかんだけ無くなったからってビタミン戦争が本当に起こるわけでもない。では本当にみかんは必要ないのか。僕は必要だと思う。いや、必要としているの方が正しいかもしれない。なぜなら僕はみかんが好きだからである。僕以外にも同じくみかんが好きな人はたくさんいると思う。僕は小さい頃からみかんが好きで、みかんを食べるのを楽しみに家に帰っていた記憶がある。今でもみかんを食べることは僕の日々の活力になっている。だからみかんはこの世界に絶対必要ではないが、僕にとっては必要不可欠なのである。そんな僕にとって日々の楽しみや活力になっているみかんを生産してくれているみかん農家に僕はとても「ありがたい」と思っている。これが本当に「ありがたみ」を感じることだと僕は思った。そして僕が思っているより「ありがたみ」を感じて食べることは難しいことではなかった。

　今回この「ありがたみ」というキーワードについて考えてみて気づいたことがある。まず消費者は生産者の農産物を生産する過程、努力、思いを全て知ることは難しい。だが消費者は生産者の「努力」に「ありがたみ」を感じるのではなく、日々の楽しみや活力になっている農産物を「生産してくれていること」に「ありがたみ」を感じるべきだということ。そして生産者はただ野菜やみかんを生産しているだけではない。農業とは農産物を生産するだけではなく消費者の日々の楽しみや活力も生産できるすごい職業だということだ。だから生産者は消費者が生産する過程、努力、思いを知らずに農産物を食べていても腹を立てることはない。むしろ楽しんで食べてくれるならそれが本望なのではないだろうか。だから僕はこれからも食事の前には全力で食事を楽しむために「ありがたみ」をこめてこう唱える。

　「いただきます。」